

第4章 インタビュー調査から (3)

鶴見と中南米



受田宏之

東京外国語大学総合国際学研究院准教授

はじめに

横浜市鶴見区の多言語・多文化状況を考える際、中南米諸国とのつながりの深いこと、いわゆる日系人の比重の高いことは、重要な特徴である。鶴見の日系ブラジル人やペルー人の声を聞くと、他の地域に住む日系人との共通点が浮かび上がる一方で、鶴見の独自性を見出すこともできる。

鶴見への日系人の流入は、中南米諸国が対外債務危機に呻吟するなか日本がバブル景気を謳歌する1980年代後半に始まり、1990年の入管法改正という制度変更を受けて急増する。2010年11月末時点の外国人登録者数をみると、鶴見の総人口267,152人の3.6%にあたる9,582人の外国人が居住していた。うち中南米諸国の出身者は主に、ブラジル人(1,372人、外国人の14.3%)、ペルー人(500人、同5.2%)、ボリビア人(169人、1.8%)、アルゼンチン人(54人、0.6%)、パラグアイ人(29人、0.3%)となっている¹。ブラジル人の比重は、近年増加の著しい中国人(3,115人、外国人の32.5%)、逡減傾向にある韓国・朝鮮人(1,854人、同19.3%)に次ぐ第三位であり、ペルー人は、中国人ほどではないにせよ増加基調にあるフィリピン人(990人、10.3%)に次いで第五位である。アジアには及ばないものの中南米出身者は、多言語・多文化化の進む鶴見において確かな位置を

占めている。

日系人の日本への「還流」の背景として、日本と中南米諸国の経済格差が挙げられる。2009年の1人あたり国民総所得を比べると、経済の低迷が叫ばれて久しい日本は37,870ドルであるのに対し、天然資源に恵まれBRICsの一員でもある大国ブラジルは8,040ドル、アンデス諸国の中で近年安定した成長を遂げているペルーは4,150ドルに過ぎない²。厳しい環境と冷たい眼差しに耐えながら日本人のやりたがらない仕事に就く誘因は、今後当分はあるといえるだろう。

筆者は、メキシコの経済や先住民の社会開発を専門とする研究者であり、日本の移民問題を追ってきたわけではない。だが、ラテンアメリカとつながる日系人は不当に扱われている、日本社会は彼らの持つ潜在力を生かしきれていない、という思いから本プロジェクトに参加してきた。以下では、最初に日系人全般にあてはまる論点を考察し、続いて鶴見が有するだろう特性と可能性について論じる。先行研究やルポルタージュが指摘するように、日本在住者にとって中南米との縁は、入国時期や教育年数、家族構成等と同じ1つの変数に過ぎず、「ブラジル人は」、「ペルー人は」という一般化は慎むべきである。それでも、留保をつけた上で日系人に焦点をあてることには意義がある³。資料として、インタビュー調査の結果⁴に加え、訪問調査、インターネットや政府機関から入手した情報を用いることにする。

1 日系人であることの意味

日本という地において、中南米と結びつく日系人であることは二面性をもつ。日本人と血縁関係にあることは、(他の条件を一定とするならば)日本社会への適応に有利に働くと考えられる。だが他方で、言語の違いをはじめとする中南米と日本との文化的隔たりは、少数派の日系人にのしかかることになる。このことは、インタビュー調査を引き受けてくれた19人のうち中南米と何らかのつながりを持つ12人(No.3、No.4、No.5、No.6、No.7、No.10、No.11、No.14、No.15、No.16、No.17、No.18)の語りからも窺うことができる。

日系人であることは、多くの場合、人的資本(日本語力)や社会関係資本(日本人との血縁や地縁)において非日系人よりも有利な立場にあることを意味する。政府が外国人の単純労働を禁じるという建前の例外規定を日系三世にまで設けた、それもいわゆる研修生の場合と異なり彼らに定住資格を認めた大きな理由に、日系人は日本社会への適応が容易であるため受け入れの社会的費用が少なく済むだろうという想定があった。

だが、どこまで「日本的」であるのか、日本への適応においてどれだけ優位にあるのかは、日系人と括られる人びとの間でも開きがある。日本で生まれ育った一世の場合でさえ、人生の大半を中南米諸国で過ごし、鶴見でも国外で生まれ育った子孫やその配偶者と同居する場合、スペイン語やポルトガル語を話す機会の方が多くなる（No.6の例を参照）。サンパウロやリマで生まれ育った二世や三世とりわけ彼らの親族の場合、日本語を淀みなく操り日本の習慣にもすぐに馴染める、困ったときに頼れる日本人のネットワークがある、といった連想がしばしば誤りであることは、サンプル数の限られたインタビュー調査からもみてとれる（No.7の例など）。

このように外国人労働者の中で日系人であることの有利さは入国の要件が緩和されて以降確実なものではなくなっている一方、昨今、日系人に関してメディアや政府関係者等が注目するのは、彼らと日本との結び付きではなく、彼らと中南米との結び付きが日本での生活にとって及ぼし得る否定的な影響である。言語にまつわる葛藤はおそらく、その中で最大の争点といえる。

鶴見に住む日系人は、インタビュー事例にも含まれる一世あるいは一部の二世を除いて、ポルトガル語ないしスペイン語を第一言語としている。大半の人びとにとって日本語は意識して習得すべき言語なのである。ポルトガル語、スペイン語ともに、日本語と言語上の由来、性質を大きく異にする、国際的な言語である。前者はブラジル、ポルトガル、南部アフリカ諸国など1億7,800万の人びとに、後者は大半の中南米諸国、スペイン、米国のヒスパニック系住民等3億2,900万の人びとによって、それぞれ第一言語として話されている⁵。このことは、彼らにとって慣れ親しんだ言語を保持する、子どもたちと話すときに積極的に使う誘因となる。

だが他方で、それは日本社会への統合という点では不利となり得る。ヨーロッパ系の言語を母語とする彼らは、中国系、朝鮮系の住民と比べ日本語の習得に時間がかかる。その一方で、ポルトガル語とスペイン語が国際言語であるが故に英語力に秀でていなくてもいい。日本国内において、英語の場合とは異なり、ポルトガル語、スペイン語を話せたり読める人びとはごく少数に過ぎない。日系人にとってその1つの帰結は、中南米で得た学歴や技能がほとんど評価されないということである⁶。彼らは、選択肢を拡げるため日本語を習得したくてもそのハードルは高い一方で、母国以外の多くの地域でも通用するポルトガル語やスペイン語を失うのもしのびない、という中途半端な言語環境におかれている。日本の学校教育になかなかついていけないという日系人児童の教育問題についても、学習

言語能力を高める機会の乏しいことがその一因となっている⁷。言語能力は、多くの日系人にとって重要課題であるだけでなく、教育や情報へのアクセスなど他の領域の問題とも関係している⁸。

インタビューを読み比べると、日系人が多様な人びとであることが分かる。ところが、日系人の大半がいわゆる単純労働に就きながら定住ないし永住資格を持っており、かつ数も比較的多いこと⁹から、外見も含め日本人との差異が目につき強調されやすい。外国人労働者不要論者や排外主義者にとっては、日系人の絡む摩擦や事件は、外国人との共生の困難の証拠であるとして格好の標的となってきた。

しかし、日本人との差異を際立たせたり同化の必要を説く議論は、日系人にとって不正確で不公正であるだけでない。それは、非日系人の視野を狭めてしまうものでもある。様々な場で、日系人の多様性に配慮しつつ、中南米との結び付きが日本において不利にならないような仕組みを作ることが求められている。

日系人の中には、定住志向が強く経済的にも社会的にも適応上の問題を特に抱えておらず、自治体やNPO、研究者に日系人の代表、仲介役として頼られるような世帯も存在する。彼らの語りには、「日系人の中には甘えている者がいる」、「同じ日系人だと一緒にたにされるのは迷惑だ」といった批判の含まれることがある。だが、それらを鵜呑みにして、日系人誰もが彼らを目標とすべきであるとするのは、日系人は不適応者であるという決めつけと同様に誤りである。こうした発言は、日系人に対する偏見から自分たちを守りたいという心理的機制からなされた面がある上、「成功」は個々の特殊事情—比較的早期に来日し興した自営業が軌道に乗った、(日本企業は採用時に高く評価しないにせよ) 大学卒の学歴を有する、近親者の死亡等により出身地との縁が薄れた、など—によってかなりの部分説明できるからである。日系人は多様なのであり、リーダー的な資質を有する人びとの重要性は認めつつも、彼らも直接の接点を持たないような「顔の見えにくい」日系人 [梶田・丹野・樋口 2005] のことを理解しようとする、そうした人びとが政策の網の目から抜け落ちないようにする工夫が必要とされている。

少数派の文化の尊重が多数派社会からの疎外をもたらさないようにすることは今日の多文化主義の課題であるが、鶴見の日系人については何がいえるだろうか。ここではインタビューや現地訪問を通じて感じたことを3点指摘しておきたい。第1に、少なからぬ日系人がニュアンスに差はあるものの、職場や教室での差別、いじめに言及していること (No.4、No.10、No.11、No.17 など) は、受け入れ側の問題として深刻に受け止める必要がある。第2に、静岡県浜松や群馬県大泉ほ

どではないにせよ、鶴見の沿岸部や臨海部の日系人集中地区の周辺には、パルー料理店やブラジル食材店等のエスニック・ビジネスが散見され、日系人には憩いと交流の場となっている（経営にかかわっている No.5、No. 17 の事例を参照）。だが、筆者の調べた範囲で平日のランチを提供する料理店が一軒しかないことが示唆するように、非日系人の客は疎らである。もしもエスニック・ビジネスが韓流ブームにおけるように日本人にも浸透していくならば、その経済的・文化的意義は大きなものがあるだろう。第3に、肯定的な含意を持ち得る最近の変化として、介護労働に従事するないしそれを目指す日系女性が増えている [藤巻 2010]。介護サービスは、一定の日本語能力や業務の内容に応じた資格習得を要件とするものの、高齢者と接する仕事の現場では、日系女性であることがむしろ有利に働く場面があると考えられる。

2 鶴見の特質と可能性

前節では鶴見に限らず広く日系人に当てはまるだろう論点を扱った。だが、地理、産業構造、自治体の対応を含む受入れの歴史など、移民のおかれた状況には地域差がある。以下では、鶴見の将来を見据えつつ、同区の独自性として3点を列挙し本章を終えることにしたい。

第1に、インタビューの中でも鶴見という土地に対する肯定的な意見が目立ったように、移民にとっての住みやすさが挙げられる。京浜工業地帯に属すると同時にベッドタウンとしての性格を持つ同区は、古くから国内外の様々な人びとを引き付ける場であった (P.127 「“つるみ” の移民状況を読み解くための歴史年表」参照)。朝鮮半島や沖縄出身者への差別、住み分けなど、その過程はときに対立や抑圧を孕むものであったが、住民は背景の異なる人びととの共存の作法を学んでいった。また、日系人に限っていえば、横浜市の中ではその比重は高いものの、対住民比でみても対外国人比でみても突出しているわけではない。特定産業に集中的に雇用されるブラジル人やパルー人が特定地区に集住する場合のような、摩擦の顕在化しやすい状況にはない。地方都市に比べれば地価は高いといえ、雇用機会、外国人との接し方や距離の取り方において、鶴見は日系人にとって住み続けるだけの魅力ある場であると考えられる。

第2に、鶴見の日系人の日本とのつながりには沖縄という核がある (序章参照)。1980年代後半から来日する日系人の相当部分は、戦後中南米に移住した沖縄出身者ないしその関係者であったが、彼らにとって鶴見という土地は、同郷者が古くから生活を営んできたという点でも居住地となる資格を備えていた。特に初期

に流入した人びとが電設業に参入し成功を収め、日系人にとっての重要な雇用先となつてからは、沖縄を介して鶴見と中南米を結ぶネットワークが形成されるようになった。一世とそれ以外の人びとでは郷土への愛着にギャップがあるだろうものの、沖縄から移住した人びとの伝統的な互助メカニズムであった頼母子講を実践する住民がいるなど（No.5を参照）、沖縄との結び付きは豊かな独自性をもたらしてきたし、今後もそうし続けるであろう。

最後に、区が市とは別に多文化共生の推進を掲げるようになった（各論1章、5章参照）。評価すべきは、自治体の側が、2008年6月の「鶴見区多文化共生推進アクションプラン」の策定、2010年12月の国際交流ラウンジの開設といった形に残る施策を行うと同時に、1)日系人のリーダー層や若者と2)NPO(ABCジャパン等)職員や小中高等学校の教員、大学生など日系人支援に関心ある日本人、との間に構築されてきたネットワークを活用し、さらに発展させようとしている点である。繰り返し述べてきたように、日系人は同質的な人びとではなく、こうしたネットワークを生かせば彼ら内部の分断がつながるだろうと考えるのは楽観的に過ぎるだろう。しかし、参加していない人びとの場合でも、親戚や知人の誰かが参加するネットワークが身近にあることは貴重といえる。

世界経済危機の悪影響、移民に対する排外主義的な運動の存在、対処療法に終始しがちな中央政府の無策など、日系人をめぐる見通しは明るいものではない。だからこそ、鶴見区という現場の経験、挑戦を外に向けて発信することには価値がある¹⁰

[注]

- ¹ 日本国籍を有する一世や帰化した者など、中南米とつながりはあるものの外国人でない者、および一時滞在者や不法滞在者は、ここには含まれない。
- ² 世界銀行の推計（GNI per capita, Atlas method）。ボリビアは1,620ドル、アルゼンチンは7,570ドル、パラグアイは2,270ドルである。
- ³ 日系人をめぐる諸論点を包括的に論じた研究書として梶田・丹野・樋口（2005）があり、日系人を含む外国人労働者の問題点を鋭く描いたルポとして安田（2010）がある。鶴見区の日系人については、福元（2008）を参考にした。
- ⁴ 質的調査である本インタビューは、サンプル数も少なく無作為に抽出したわけではないが、中南米とつながりのある12人は比較的恵まれた層に偏っている可能性が高いことを断わっておく。
- ⁵ Ethnologueのwebサイトより（2010年12月8日）。
- ⁶ ブラジルに戻ったとしても、安定した専門職を得ることは容易ではなく、かつ日本で従事したような肉体労働は近隣国から流入した外国人労働者が担うこともあるなど賃金は格段に低い。このため、多くのブラジル人は雇用状況の悪化した日本に留まらないし再入国しようと試みることになる [深

沢 2009]。

- ⁷ ブラジルへの帰国を考えていたり日本の学校の授業についていけない子どもたちのためにいわゆるブラジル人学校があるものの、制度上の支援や施設の不備のため、そこでブラジルの中高等教育機関の求めるようなポルトガル語能力を習得できる保証はない。
- ⁸ 2009年7月に横浜市内に住む外国人成人に実施された意識調査 [横浜市都市経営局2010] (回収調査票数N=1,812)によれば、鶴見区に住むブラジル人は、中国人、韓国・朝鮮人、フィリピン人と比べ、日本語能力に自信を持っていない。日本語を話すことについて、「よくできる」、「まあまあできる」、「あまりできない」、「できない」から選ばれた回答の分布をみると、中国人 (それぞれ24人、30人、8人、2人、無回答1人)、韓国・朝鮮人 (同31人、10人、3人、0人、1人)、フィリピン人 (4人、13人、3人、2人、0人) と比べ、ブラジル人 (3人、9人、9人、4人、0人) の日本語能力についての自己評価は低いものであった。日本語を読むことと書くことの質問についても、回答は似た傾向を示していた。
- ⁹ 2007年末時における全国のブラジル人登録者数は316,967人、ペルー人登録者数は59,696人だった。リーマン・ショックをはさむ2年後の2009年末時にはそれぞれ267,456人、57,464人となっており、ブラジル人の減少が顕著なもの、それでも両者を足すと30万人を超えている。
- ¹⁰ 鶴見区のブラジル人登録者数、ペルー人登録者数はそれぞれ、2008年末の1,578人、519人から2009年末の1,624人、543人へと微増したもの、2010年11月末時点では1,372人、500人へと大幅に減少している。この減少が長期的趨勢となるのか一時的な変動に過ぎないのかは、鶴見の今後の状況ならびに中南米諸国と日本の経済動向によるだろう。

[文献]

- 梶田孝道・丹野清人・樋口直人『顔の見えない定住化—日系ブラジル人と国家・市場・移民ネットワーク』名古屋大学出版会、2005年。
- 深沢正雪「ブラジルに仕事はあるのか 帰りたいくないデカセギたち」『イミグランツ』Vol.2、2009年、10-12ページ。
- 福元雄二郎「我が国に於けるラティーンズ集住地域を考える視点—鶴見区潮田地区を事例として」神奈川大学人文学研究所編『在日外国人と日本社会のグローバル化—神奈川県横浜市を中心に』御茶ノ水書房、2008年、189-211ページ。
- 藤巻秀樹「介護現場に進出した日系人」『イミグランツ』Vol.3、2010年、29-30ページ。
- 安田浩一『ルポ 差別と貧困の外国人労働者』光文社新書、2010年。
- 横浜市都市経営局『外国人市民意識調査 報告書』、2010年。